

## 論 説

# 「儒商・徳治」の道：理・礼・力・利を軸とする 中国政治の統治文化( 2 )

夏

剛

### 5 . 中国の価値体系の基軸と重層：理・礼・力・利

書家・評論家の石川九楊は『二重言語国家・日本』の中で、日本は日本語が構造的に孕む駄洒落から生まれた国だと断じた<sup>46)</sup>。毛沢東の仮名の絡繰<sup>47)</sup>が示す様に、中国人の思考回路でも「諧音」(語呂合わせ)は重要な役割を果たす。「生・声」や「命・名」の切り口も、孔子の「政者、正也」(政[治]とは、正[しく行う事]也)、孟子の「仁也者、人也」(仁とは、人[徳]也)の命題と同じく、音通の示唆の所産に他ならない<sup>48)</sup>。蒋介石は清の文字訓詁学者・段玉裁の『説文解字註』を息子・経国の少年期教育の教材にし、1日10字ずつ3年掛けて覚えるよう命じたが、其の「一生受用不尽」(生涯に尽せぬ受益が出来る)の期待<sup>49)</sup>の通り、漢字の「教益」(教示に因る受益)と生産性・再生産力は絶大だ。

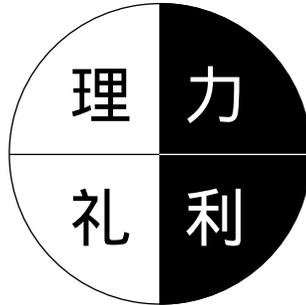
中国人は「四喜」の様に対+対の二重複合を好むが、中国の価値体系の基軸を4点に収斂するなら、同音の「理・礼・力・利」が思い当たる。此の4要諦は大雑把に概括すれば、「理」は理念・道理・論理・理想等、「礼」は礼儀・礼義等、「力」は実力・武力・権力・勢力等、「利」は利益・利害・功利等だ。何れの要諦も低次と高次、狭義と広義の2元を持ち、他の要諦に接点を持つ事も多い。例えば、理には「小道理」(具体的・局地的な各論)と「大道理」(抽象的・全体的な総論)が有り、礼には小我(個人・家族)の「修身・齐家」と大我(集団・社会)の「治国・平天下」が有る。マナー・エチケットの礼儀に対して、人間・世間の正しい道なる礼義は礼・理に跨がり、功利は力・利に跨がる。

中国思想の複雑系は単純化すると、此等の要諦の複合・錯綜に帰せよう。例の「得人一牛，還人一馬」は理+礼+利の組み合わせで、『名賢集』の前文の「人為財死，鳥為食亡」の利+理(摂理・法則)に繋がる。共産党中国の合い言葉「富強」(富裕・強大)の利+力は、国是の「社会主義道路」(社会主義の道)の理(觀念形態・建前)、理想の「精神文明」の礼と重層を成す。春秋・戦国時代の諸子百家から20世紀の国民党・共産党まで、権力者・学識経

験者にしる庶民にしる，中国人の志向・思考の基軸は煎じ詰めれば，礼・理・力・利に集約し切れる。

1917年から30年間も上海で内山書店を経営した内山完造は，魯迅との親交が象徴する様に「儒商」の資質を持った人物だ。中国人社会の表門・裏門の二面性を見破った彼の直観<sup>50)</sup>は，商売・生活の豊富な経験に裏打ちされた見識だ。「得人一牛，還人一馬」と「人為財死，鳥為食亡」の隣接の合理性を証すかの如く，毛沢東は他者への謝恩で前者を実践し，部下の勤務評定に当って後者を本能として肯定した<sup>51)</sup>。孟子の「此一時也，彼一時也」(此の時は此の時，彼の時は彼の時)<sup>52)</sup>，庄子の「是亦彼也，彼亦是也。彼亦一是非，此亦一是非」(是も亦彼なり，彼も亦是なり。此も亦一理有り，彼も亦一理有る)，及び後者の変転の環を支配する「道枢」<sup>53)</sup>は，此等の相剋相生の相関の整合に役立つ。

其の枢めく道の中核の見立てを鍵概念に学問的に整理すれば，表門+裏門の様な重層・複合は，中空めく玄妙な枢軸を巡る回転扉風の機関<sup>からくり</sup>に思える。静的な平面形象図<sup>イメージ</sup>に於いては，道徳的に高く評価されがちの顕教的な理・礼は円の左側に在り，低く評価されがちの密教的な力・利は其の対蹠に在る。片方の理は高邁な故に上段に構え，礼は自制の故に下方に控えるが，反対側の力は強烈な故に上方に出て，利は隠蔽の故に下方に位置する。



力・利は実力・実利の様に実の性質が強く，右の実と左の虚(理・礼)は対に成る。一方，「礼義・礼儀・利益」の同音は「理・礼・利」の相関の表徴と思える。虚の中に実が有り実の中に虚が有る其の繋がりも「陰陽魚」の変種だが，道徳的な評価で陰の部類に入る。右の力・利は，又其々陰・陽の2極を持ち併せる。其の2面は即ち，歴史の前進に寄与する生産力・技術力・行動力・発信力や功利・効率と，進歩を妨げる乱暴な武力や邪悪な私利だ。負の後者に対して，利は公益や合理の部分に於いて理と連環を成し，実力は繁榮・平和の実現に欠かせない。

儒教の身 家 国 天下の4「層次」(次元)に対応して，力には人力・民力・国力の多元が有る。力・利は個我の次元で労働・収穫の意味も併せ持ち，共産党の中国人自慢の「勤労、

「儒商・徳治」の道：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化（2）（夏）

勇敢、智慧」（勤勉，勇敢，智慧に富む）の3美德は，前の2項と最後の方は其々力・利の範疇だ。「道理」（人倫）に則り規矩を踏まえ努力を払い報いを得るといふ儒教の人生哲学の指向は，正しく理 礼 力 利の展開である。

利は日本語で同音の「鋭利・営利」の両面を備え，「禾+利（刀）」の字形は力との共通を示唆する。共産党中国の国徽（国家の記章）<sup>54</sup>の意匠に出る齒車・稲穂は，他ならぬ労働・収穫の表徴だ。中共の党旗の意匠 斧・鎌の交叉<sup>55</sup>は，戦闘精神・実利志向の力・利の突出の様に映る。4つの小さい星が共産党の象徴 大きい星に向って其の周りに分布する共産党中国の国旗の意匠は，『論語・為政篇第2』の篇名の由来 孔子の「為政以德，譬如北辰居其所，而衆星拱之」（道徳を以て政治を為せば，北斗が自分の場所に居て，多くの星が此に向って敬礼する様に成る）の通り，理・礼の支配・尊崇の觀念形態<sup>イデオロギー</sup>の表現だ。

此の様に理・礼・力・利は到る処に在り，各々の内部や相互間の陽陰，清濁，明暗の組み合わせは動的な複合・旋回を展開して行く。5星紅旗の4極+中心は陰陽5行に沿う図式だが，理・礼・力・利4諦の流動は万華鏡の様に中心が明確な形態を現わさぬ。中国と共に古代の4大文明の半分を占めた印度でも形而上の要諦が大事にされるが，醍醐味が最高と成る印度の5味は乾酪を敬遠しがちの中国人には馴染まない<sup>56</sup>。中国の5味 甜・酸・苦・辣・鹹（塩辛い）は俗世の匂いが強く，理想的な1極に由る支配は成り立つまい。80年代の時代精神を映す文学界の新語 「折光」・「雑色」<sup>57</sup>は，中国的な心性の屈折・複雑さの形容たり得るが，「雑味」の隠し味を吟味したい。

## 6. 「礼義之邦」の伝統と「經濟動物」の根性

中共の社会主義に於ける「中国特色」の比重や中国の伝統の根の深さは，海外でも国内の一部でも十分に認識されていない。『聖書・ヨハネに由る福音書』の冒頭の「始めに言葉有りき」の中国語訳 「太初有道」<sup>58</sup>は，老子が言う「常道」（普遍的な道理）の「衆妙之門」（諸々の奥妙が集まる門）に当る原理の根幹を示唆する。本稿の題の中の掛け言葉 「道」（みち/どう）に絡むが，「社会主義道路」も中国人社会の物事の裁断基準の「道理」も，無形にして不可欠な空気めく言語に由って規定される処が多い。

邱永漢の台湾脱出 日本への亡命も直木賞受賞後の実業界への転身も，危険に挑む「下海」<sup>リスク</sup>の拳動と言える。「金儲けの神様」の異名を持つ彼は文筆活動だけでなく，東洋の道徳を重んじる点でも「儒商」と見做せよう。自らの体験に裏打ちされた其の「日本人＝職人的；中国人＝商人的」<sup>59</sup>説の通り，一般論として相対的に考えれば漢民族は根から商魂逞しい人種だ。其の根性を掴める手掛りには，言語の投影と言語への投影が有る。

「待価而沽」と関連して，「評価」や「估計・估量」（見積もる。見通す），「衡量・權衡」

(軽重・得失を天秤に掛ける。斟酌する)、「商量」(相談)、「打算」(心算)等の字面と発想に、漢民族の計算高さが現われる。高い評価を表わす日本語の「買う」も商人的な承認の意だが、中国語の「賞識」は上品ながら語義が一緒だ。両国の言語に於ける利得の色合いの濃淡を象徴する様に、儒・商複合の「教益」は日本語には無く、「人民」を冠した上で国民党時代の名称を踏襲した共産党中国の政治協商会議(下院相当)の「協商」も日本語では未発達<sup>イデオロギー</sup>の儘だ。

中国に関する日本人のもう1つの固定観念は、「共産党(特に毛沢東)時代=革命の観念形態・独裁の一枚岩」だ。日本では無条件で理想化されがちな儒教に対して、毛沢東時代は曾て一部の知識人に美化された後、昨今は全面的に「醜化」(「美化」の反対語)されがちだが、2つの極端とも単純過ぎる。中共の「外毛内周」の重層を指摘した識者の見方<sup>60)</sup>も、深く考えれば一面的に過ぎない。理想主義者に映る毛沢東は現実主義の側面も強く、現実主義者に映る周恩来は理想主義の側面も持つ。一方、「文化大革命」は理(原理)・力(実力)へ一辺倒の様相が強かったが、礼の顕在と利の健在も見過ごせない。

「無法無天」の中にも礼儀が有った例として、演説や文書等の常套句の「致以革命的敬礼」(革命的な敬礼を致す)が挙げられる。序列の規定に腐心する「排名学」(リスト編成学[芸当])の発達<sup>61)</sup>は、礼の一掃どころか一層の厳格化を証した。官民から「敬祝~」(謹んで~祝福します)の祈りを捧げられた毛沢東は、恩師等に律儀な恩返しや気配りを続けた<sup>62)</sup>。林彪は毛宛ての請訓報告で最上級敬語の「呈~」を使い<sup>63)</sup>、集会の際に主席より早く着くよう随員に厳命した<sup>64)</sup>。林彪一味は周恩来の<sup>バランス</sup>均衡感覚を狡猾い保身と取ったが、彼も五十歩百歩であった。毛も賛同した孔子の「毎事問」(事毎に逐一訊ねる)の由来は、周公の廟で作法を逐一確認した故事である<sup>65)</sup>が、武人の野心家・林も大事な儀礼に関しては、孔子の弟子・曾子が感銘し<sup>66)</sup>「当代周公」・恩来が体現した『詩経』の「戦戦兢兢、如臨深淵、如履薄氷」(戦戦兢兢にして、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如し)を心得ていた訳だ。

曾て訪ソの毛沢東は共同声明を巡る協議で、構えが立派で内実も伴う理想的な形を「好看又好吃」(見栄が好くて美味しい)と表現した。虚の理・礼と実の力・利の「兼顧」(兼備。両立)の狙いを言い得て妙だが、中国側の通訳はスターリンが解せなかった此の比喩を、「好看」を「官(冠)冕堂皇」と講釈した。<sup>67)</sup>今や上辺<sup>うわべ</sup>だけが立派で内容を伴わぬ言辞の意に転義した此の熟語は、荘厳で堂々たる建物の外観が原義だ。「満朝朱紫貴」の「顕赫」([権勢・名声等が]赫々たる様)とも重なるが、人民大会堂の立派さ等を形容する「富麗堂皇」(華麗で堂々たる様)と共に、「宗廟之美、百官之富」に符合する。

中国語との微妙で本質的な懸隔を映して、「官(冠)冕堂皇」も「富麗堂皇」も日本語には無いが、2つの熟語に即して考えると、「美好前景」(素晴らしい未来)や「壯麗山河」(壮麗な山河)等の美辞麗句が踊る「文革」中、『毛主席語録』や毛沢東思想への礼賛には「富・宝」が目立った。「紅(赤い)宝書」や「巨大的精神財富・無尽的宝庫(宝蔵)」(「的」=連体修飾

「儒商・徳治」の道：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化（2）（夏語）云々には、官民の巨富願望が読み取れる。翻って思えば、「估量・商量・衡量」には商人的な計算と共に、中国的な「物量主義」<sup>68)</sup>の妙味も有ろう。量に物を言わせる側面と物事の<sup>バランス</sup>均衡を量る側面は、「物量」の力・利の2面を成す。

中国最古の王朝の名「夏」「商」は、単語として其々「盛大・華麗」「買売・商量」の意を持ち<sup>69)</sup>、日本語に無い「富強」の2極は其の複合に織り込んである。民衆に「無商不奸」（商人には腹黒く[狡く]ない者は居ない）との偏見が根強い反面、中国人の自称の「夏」の出典が『書経・舜典』の「蛮夷猾夏」（野蛮な夷[北方の少数民族]と狡猾な夏[中華民族]）であり、「商」が中国民族の先祖が世界に誇る文明大国の称号と成ったのは、共産党中国の第2世代領袖の指導の下で拝金主義の蔓延を伴って強盛に成って行く変貌と併せ考えれば興味深い。近代化への助言を外賓に吸い上げる鄧小平や第3世代の指導者・朱鎔基の貪欲<sup>70)</sup>は、梁惠王の直線的な功利願望を彷彿とさせるが、中共及び其の主体なる工人（労働者）階級の「共・工」は「功」と同音だ。「功」は字形通り4要諦の中で「力」の範疇に属するが、中共の党旗の斧・鎌の意匠が象徴する様に、功利願望は何時も中国の歴史の推進力だ。

## 7. 「儒将 儒商」「王霸 徳治」を貫く功利主義

改革・開放の抵抗勢力の「姓（性質）は無産階級か資産階級か」の疑問は鄧小平の激怒を買った<sup>71)</sup>が、各階層を象徴する国旗の4つの小さな星の当初の意図 工人・農民・<sup>プチブルジョア</sup>小資産階級・<sup>ブルジョア</sup>民族資産階級<sup>72)</sup>は、「姓“無”」「姓“資”」が半々を占める具合だから、其を認めた毛沢東の時代でも決着が付いた事に成る。斧・鎌<sup>かたど</sup>で模る労働者・農民に対する中共の尊重は、別に商人への排斥を意味しない。共産党中国が社会の主体とした階層の「工農兵学商」<sup>73)</sup>の中で、「学」（学生・知識人）の次に「商」が出る。封建時代の「土農工商」と同じく商人・接客業等は末席に置かれるが、存在の価値は十分に認められている。1958年、毛の元政治秘書の中央政治局委員候補・陳伯達が鼓吹した人民公社の構想には、商品経済を否定する当人の極左思潮とは裏腹に「工農商学兵」が有った<sup>74)</sup>。

文人理論家の彼は後に「中共中央文化革命領導小組」の長を経て党のNo.4まで昇進したが、其の意外な「商」の高い位置付けは「文革」の裏面を窺わせる。紅衛兵が言う「党政財文大権」も、財政は文教の前に出た。「財政」も深読みすれば妙な語順だが、其の4権の中で通常党・政に次ぐ軍が抜けたのは、筆を武器とした「衛兵」の本物の銃を握る兵に抱く忌憚か。毛沢東逝去の際の『告全党・全軍・全国各族人民書』（全党・全軍・全国各民族人民に告ぐ書）の順位でも、建国に決定的な寄与をした軍・力の聖域たる存在が示唆された。毛に対する林の礼賛は竹内実の洞察の通り、権力再分配を求める「勘定書」の魂胆が有った<sup>75)</sup>。其の「表礼裏利」の二面性はさて置き、兵・力に対する執着は毛・林の同根性だ。

周恩来を「当代大儒」とし其の失脚を狙う極左派は1974年、「批林批孔」(林彪・孔子批判)と「評儒研法」(儒家の批評・法家の研究)の「運動」(キャンペーン)を張った。法家への肯定は共産党中国の専制体制を裏付けたが、法家と並んで儒家の対蹠に在るのは兵家だ。中国人の対内・対外交渉の常套手段には、「先礼後兵」(先ず礼を尽くして、効かぬ場合は強硬策に出る)と有るが、孔子と毛・林は正に礼と兵の両極だ。林彪一味は毛の「封建的社會主義」を攻撃したが、前近代的な伝統は毛・林の両方に見られる。

内山完造は中国人社会の表裏の例に、儀礼的な宴会に続く商談の真剣勝負を挙げた<sup>76)</sup>が、此の流儀も「先礼後兵」の変種と言える。儒の礼儀作法と儒・法混合の礼義 - 統治の両義を持つ「礼法」は、『荀子』の『王制』『王霸』篇が出典であるが、「王霸」は王道・霸道の複線を示唆する。「共・工」の接点から古代神話の中の部落首領・共工氏が連想されるが、「工農紅軍」(労農赤軍)時代の毛が礼賛した<sup>77)</sup>彼は、敗戦の悔恨で頭を不周山にぶつけ天柱を崩した一幕の様に、「争強好勝」(勝ち気が強い。負けず嫌い)までの熾烈な闘争・反逆心の権化だ。「商量」と部分的に重なり値踏みの含みも有る「打量」([外觀を]観察する。推量する)の様に、中国の言語・観念には力+利の複合が多い。

「儒商」は「儒將」(儒者の風格を持つ将帥や文官出身の将帥<sup>78)</sup>)を擬った言葉と思われるが、儒・兵は同じく4要諦図の左・右に在る儒・商と同様に隣接し、兵・商も縦軸に於いて隣り合う。山本七平は旧日本軍の精神主義への反省を踏まえて、『孫子兵法』の徹底的な現実主義に畏敬の念を表わした<sup>79)</sup>。『広辞苑』の「兵家」の語釈に「用兵・戦術などを説いた」と有るが、欠落した「用人」(人を使うこと)戦略の神髄は、理・礼・力・利の原理を駆使する操作だ。『実践論』『矛盾論』(俱に1937年)と共に毛沢東の主著に入る『論持久戦』(38年)等の戦法論は、現代の兵家の傑作と言える。其の変名の「得勝」<sup>80)</sup>の「勝」は「生・盛」と音通だが、生存・強盛 日本語でも音通の「得・徳」には、2国共通の義・利の相互内包の素地が現われる。

「理」は「王」偏が象徴する様に、中身はともあれ中国では永遠の王道とされる。毛沢東に煽てられた紅衛兵の「造反有理」は中身が理不尽だが、「有理」を以て正当化しようとした処は理の不尽の優位の証だ。「文革」の暴走も含む毛沢東の闘争は孫子と同じく、道理・原理を基軸とする治世・知性が目立つ。毛は自らの氣質を主たる「虎気」(虎の氣質。勇猛・非情等)と副次的な「猴気」(猿の氣質。元氣・反逆等)の複合と規定した<sup>81)</sup>が、後者の由来 「造反衛兵」の元祖・孫悟空を始め、古典文学は現代中国の傑物の内面を透視し社会の裏面を照射する光源と成る。

内山完造は桃太郎物語と『西遊記』とを比較し、余所への征伐や財宝の掠奪が出た前者の軍国主義的な匂いを指摘し、仏教經典貫いを目的とする後者の文化的な香りを評価した<sup>82)</sup>が、『西遊記』に於ける力・利の要素も看過できない。彼が喝破した表門・裏門の2重基準を証す

「儒商・徳治」の道：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化（2）（夏）

様に、釈尊の10大弟子の1人の名を借りた仏・道糶合の虚構人物<sup>83)</sup>・須菩提祖師が、抜群な門人・孫悟空に「開方便之門」(好都合の方途を提供する。便宜を与える)の心算<sup>つもり</sup>で裏門を暗に開けて置いた<sup>84)</sup>。其の使い分けと利益の提供は俗物的な鼻屑とも取れるし、1日に千里も走る駿馬に特別メニューを与える伯楽の苦心<sup>85)</sup>とも思える。

一方、安価を意味する中国語の「便宜」に絡むが、唐三蔵に対し經典の無償譲渡を渋り謝礼を無心した2尊者を如来菩薩が弁護する1齣<sup>86)</sup>は、子孫の為に安売りしまい発想と共に、中国的な現実主義を映し出す。曾て党幹部への賄賂を拒んだ主治医を世間知らずとして毛沢東がからかったのも、其の西方浄土の不純な側面の造形の背景を示す態度だ。<sup>87)</sup>無邪気な孫悟空も無垢なはずの如来の打算と対を成す様に、長生術の伝授でないと祖師の説法も聞かぬ実用志向を露出した<sup>88)</sup>。孫悟空気取りの毛はキッシンジャーとの会見で印度哲学は空言の塊として貶した<sup>89)</sup>が、談義の相手の遺伝因子に有るユダヤ人気質との共通性は、印度仏教の代表格に対する『西遊記』の恣意の改編にも窺われる。意味深長な事に、著者・呉承恩は周恩来と同じ江蘇省淮安県の人であり、此の伝奇小説で多用された江蘇北部の方言<sup>90)</sup>は周恩来と江沢民の郷音だ。

## 8. 仁義無き実用主義と仁義重視の理想志向の表裏一体

1975年、極左派は毛の『水滸伝』論評を受けて、周恩来を「投降派」・宋江に見立て攻撃した<sup>91)</sup>が、宋を参照物として眺めれば周の別の側面が目につく。日本人の周恩来観には儒教の固定形象<sup>イメージ</sup>と同じ理想化の傾向が強いが、革命の為なら妾や娼婦に成るのも辞さぬと言う内戦時代の彼の決意<sup>92)</sup>は、鄧の「黒猫・白猫」論よりも凄しい現実主義だ。「文革」中に領袖に追随しつつ其の失政を食い止めようとした彼の在り方は、正しく左様な実践である。「文革」の嵐に耐える庶民の強かな生き方を描く映画・『芙蓉鎮』(小説原作=古華、監督=謝晋。1986年)の名台詞<sup>せりふ</sup>「像牲口一樣活下去」(家畜の様に生き抜け)<sup>93)</sup>の生存本能と違って、「為革命」の目的が前提を成す臨機応変・無節操は、理想・信念の為の忍従・韜晦で高次の理・利なのだ。

駒田信二は忠臣・豪傑の負面を暴露する『水滸伝』から、影の部分の添加に由って話を膨らませる中国の表現様式を見出し、武士道の理想像を儒教道徳に拠って統制し勸懲小説の趣意を貫く馬琴の読本から、影の部分の排す日本的な発想を読み取った<sup>94)</sup>。愛人殺害の罪で服役中の宋江が反逆の詩作に因る罰を逃がす為に屎尿に塗れて瘋癲を偽装した挙動等は、確かに格好が悪いが、行為・造形の2方とも勇気が要る。玉皇大帝の婿と自称し10万の天兵を率いてお前を遣っ付けると叫ぶ瘋癲の演技<sup>95)</sup>は、穿って観れば英雄主義の発露と思えるが、英雄の首領に敢えて汚点を付ける発想は凄しい。『椿説弓張月』の「事に迫りて死を軽んずるは、大和魂なれど多くは慮<sup>おもいはかり</sup>の浅きに似て、学ばざる<sup>あやまち</sup>の候なり」は、自民族固有の精神の負面を窺わせる。勇猛で潔い「大和魂」や優しくて柔らかく「大和心」に対して、中国人が自賛する国民の美德の

「勤勉・智恵・勇敢」には、高潔・柔和は入らない。

俗語の「笑貧不笑娼」(貧乏[人]を笑うが[輕蔑しても]売春[娼婦]を笑わぬ[輕蔑しない])は、革命の為なら妾や娼婦に成っても構わぬ周の心構えと鄧の「黒猫・白猫」「先富論」の裏付けに成る。あらゆる手段や代償で生活の向上を求める中国人の願望は、「万惡之首」(諸惡の頭)たる「淫」以上に罪深い淫売よりも貧困と其の甘受を輕蔑する此の逆説に端的に出る。『増広賢文』の「貧居鬧市無人識，富在深山有遠親」(貧乏人は繁華街に居ても誰も相手にせず、金持ちは山奥に居ても縁戚[と自称して近寄る者]が有る)は、善悪を超える現実として富強の悲願の根底に有る。第2次国・共戦争の際に林彪の膝元・東北で生まれた中共空軍の草創期に、旧日本軍の教官が指南役を果たした<sup>96)</sup>が、「敵ながら天晴」の発想を持つまい<sup>97)</sup>中国人は、自強の為なら相手を選ばぬ「拿来(持って来い)主義」<sup>98)</sup>も遣る。

「文革」中の毛沢東賛美の修飾語で本人が唯一認めたのは、若い頃の教師体験に合致する「偉大的導師(教師。教官。教祖)」だが、内戦で勝利した中共軍は軍事理論の補強の為に、敗軍・国民党軍の将軍・教官の講義を受けた事<sup>99)</sup>は、偉大な存在に成る為に如何なる教官も受け入れる実用主義の典型だ。蒋介石は中共と死闘を交わす大陸時代と台湾時代に、曾ての日本侵略軍の司令官を軍事顧問や高級教官に起用した<sup>100)</sup>。周恩来は開国祝典の天安門城楼を飾る目玉

巨大な朱色の「宮灯」(昔宮廷用の)丸く膨らんだ灯籠)の設計を、中共軍に従軍した元日本軍人への一任を許可した<sup>101)</sup>。大事な理論武装・礼法装飾・武力対決に絡む此の3つの例は、利害を重視する中国的な心性の柔軟性・雑種性の現われた。

孔子の「小子鳴鼓而擊之，可也」の予先は、「富於周公」の季氏と其の家宰(封地の取締り)・冉求の2方に向いた。冉は「為之聚斂而附益之」(季氏の為に租税を取り立て其の富を増やした)故に、主と共に孔子から「非吾徒也」(私の徒党[仲間]ではない)と一蹴されたが、彼は孔門10哲の内にも入る。徳行では顔淵・閔子騫・冉伯・牛仲弓、言語では宰我・子貢、政事では冉有(冉求)・季路、文学では子遊・子夏、という孔子の4科10哲評<sup>102)</sup>も同じ『論語・先進篇第11』に出たが、此の褒貶は同篇の「昇堂入室」の奥義の一端を窺わせる。

堂に昇ったものの室には未だ入っていないとされた子路は、『公冶長篇第5』でも師の相対評価を受ける。其の「千乗之國，可使治其賦也，不知其仁也」(千輛の兵車を擁す[大きな]國なら、彼を兵役や軍政を統括させる事は出来るが、其の[彼は]仁か否かは判らない<sup>103)</sup>)には、仁を究極の境地とし且つ統治能力を重宝する価値観が読み取れる。次の「千室之邑，百乘之家，可使為之宰也，不知其仁也」(千戸規模の町や兵車百輛規模の大夫の領地なら彼を主管に遣らせる事が出来るが、其の[彼は]仁か否かは判らない)は、他ならぬ孔子の冉求評である。

『辞海』の「冉求」の解では、「不知其仁也」を除く此の能力鑑定と「聚斂而附益之」の非難を併記した。評価と不評の同居は陰陽混在の中国の複雑系らしいが、公の財政の為の子路の

「儒商・徳治」の道：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化（2）（夏）

行政管理と小集団の利益の為の冉求の租税回収は、性質の正・負の違いを超えて経営実務だ。役職に由る不義と切り離して冉求の主宰の力量を認め、「仁」の資格交付を躊躇しつつ子路・冉求の行政手腕を買う処は、孔子の「黒猫・白猫」への同時容認や力・利重視の一面を示した。同じ孔門10哲の冉求と子路（季路）は政事の主力を成したが、徳行・言語・政事・文学の領分は党・政・財・文の序列と考え併せると面白い。

続く孔子の赤（子華）評は、「束帯立於朝，可使與賓客言也，不知其仁也」（礼服を着けて朝廷に立って、賓客に対応させる事が出来るが、其の[彼は]仁か否かは判らない）だ。子路・冉求・子華は其々内政と外交に長けたが、「文革」中に自らが「資本主義の道を歩む実権派」の罪名で倒した鄧小平を難局克服の切札として再起させ、自分の姪・王海容を外交部礼賓司長（外務省典礼局長） 同副部長（副外相）への抜擢を認可した毛沢東も、孔子の其の価値判断に近い傾向を持った。例の3弟子は孔子より其々9，29，42歳若い<sup>リードオシエン</sup>が、毛より其々10，32，49歳若い鄧小平，江沢民，胡錦濤の年齢を思い起せば、毛以後の「儒商」や「徳（礼・文）治」時代の指導者の特質との接点も興味を引く。

（未完，以下次号）

01年度学部学生主事の職務を終えた02.3.31脱稿

## 註

- 46) 石川九楊『二重言語国家・日本』，日本放送出版協会，1999年，154頁。
- 47) 対日戦勝後の内戦で本拠地・延安からの撤退を余儀無くされた毛沢東は自ら暗号名・「李徳勝」<sup>リードオシエン</sup>を付けたが、「離得勝」<sup>リードオシエン</sup>（離れて勝利を勝ち取る）の語呂合わせとされる（曉峰・明軍主編『毛沢東之謎』，中国人民大学出版社，1992年，66～67頁）。
- 48) 出所は其々『論語・顔淵篇第12』と『孟子・尽心章句下』。「政者，正也」は「季康子問政」に対する答えだが、同じ篇の中の「司馬牛問仁。子曰：“仁者，其言也訥。”」（司馬牛が仁の事を訊ねた。孔子は言った、「仁[者]とは、其の言葉が遅鈍[控え目]だ」）も、同音の「仁・訥」<sup>レン</sup><sup>レン</sup>が繋ぎ目と成る。
- 49) 蔣経国『風雨の中の静けさ』（台湾・黎明社），江南著・川上奈穂訳『蔣経国伝』（同成社，1989年[原典=84年]）より（12頁）。『説文解字』は東漢の文字学者，経学者・許慎に由る漢字字解の不朽の名著だが、其に対する講釈が無いと普及し難いのが難点だ。10歳の息子に段玉裁註を読ませたのは合理的な教材選びだが、蒋介石が設定した日課は期間と総量が見処だ。3年掛けて1万字余りを習得させる数値目標は、中国の早期英才教育や帝王学の真髄を窺わせる。民族の精神・文化の神髄を心髄へ注入する作業は、生涯の学識・人格の中核を形成させる基礎造りだ。孟子の「有恒産者有恒心」（恒産有る者は恒心有り），及び逆の「有恒心者有恒産」（本稿筆者の造語。持続する精神が有れば安定した資産が有る）は、此の学習・受益の過程に当て嵌まる。毛沢東の「精神変物質」（精神が物質に転化する[意志が収穫を産む]）も、恒心自体も恒産たり得る原理と一緒にだが、孟子が「心・産」を対等に扱った事も意味深長だ。

其の時間・数量の「恒」に現われる中国的な「物量主義」（註68参照）は、党の幹部に活字を

- 年間1億字(一説に2億字)読めと言う胡耀邦総書記の呼び掛けにも窺える。1日の平均量(27.4万字)は約350頁の本に相当するから、同じ桁違いの日課に違いないが、質を問わぬ点では杜撰な一面も有る。中国では「為尊者諱、為親者諱、為賢者諱」(尊敬する者・親しい者・賢者[の名誉]の為に其の欠点を隠す。『春秋』の特色を言う『公羊伝・閔公元年』の言)の伝統は今だに根強いが、自称・「粗人」(野人)の彼の賢明でない部分も指摘して置きたい。因みに、彼の姓は「胡説」(出鱈目)等の様に、北方の「蛮族」を指す蔑称でもある。
- 50) 76) 内山完造『表門と裏門』(初出=『おなじ血の流れの友よ』, 中国文化協会, 1948年), 『中国人の生活風景 内山完造漫語』(東方書店, 1979年)所収, 10~13頁。
- 51) 毛沢東は1959年に側近との懇談で、所管地の経済建設の成績を謳う各地方自治体首長の心情に理解を示し、「人為財死、鳥為食亡」を引いた上で、人間は誰もが自分の労働成果を護る本能があると語った(李銳『關於毛沢東功過是非的一些看法』[1980年]、李銳『毛沢東の功過是非』[台湾・新鋭出版社, 1994年], 162頁)。
- 52) 『孟子・公孫丑下』。
- 53) 『荘子・内篇・齊物論第2』。
- 54) 大東文化大学中国語大辞典編纂室(主幹・香坂順一)編『中国語大辞典』(角川書店, 1994年)では、「国徽」を「国章」と訳したが、此の2つの語彙とも『広辞苑』等には見当らぬ。用語が無い事は往々にして概念の不在を意味するが、そもそも日本は厳密に言えば国徽を有しない。中国百科大辞典編輯委員会編『中国百科大辞典』第10巻(中国大百科全書出版社, 1999年)の付録1・『各国国旗国徽』では、多くの国の場合は国旗と国徽が別々有るが、日本は国旗=日の丸、国徽=「皇徽」(皇室の紋章)と成っている(43頁)。国徽の無い国もアフガニスタンやブルガリア等一部有るが、会社人や代議士、法曹関係者等が記章を常時付ける日本の「バッジ社会」の様相を考えれば、国旗・国徽・首都に関する規定を憲法に盛り込んだ共産党中国とは対照的な中空が改めて感じられる。
- 55) ソ共党旗から転用した中共党旗の鎌・斧交叉の図柄は生産・統治の利器の複合と取れるが、統治の機能を軸に見詰め直せば、「万字」の功德円満の意から吉祥万徳の相として仏像の胸に描く右旋の卍と逆のナチス独逸の左旋の卐の徴やファシズムが連想される。『広辞苑』に拠れば、ラテン語のfascis(古代ローマの儀式用の棒束、転じて団結の意)を語源とするファシズムは、狭義では伊太利のファシスト党の運動・理念・政権を指し、広義では第1次世界大戦後、日本を含む多くの資本主義国家に出現した全体主義・権威主義・国粹主義的な運動や支配体制を指す。共産党中国の長年の事実上の1党独裁は其の範囲に入らないが、団結維持の大義名分の下で棍棒で天安門広場の民衆を弾圧した毛沢東時代の末期政権は其への変質の危険も孕んでいた。当時の『人民日報』編集長は匿名投書で「戈培爾」(ヒトラー政権の宣伝責任者・ゲッベルス)と名付けられ、第1, 2次天安門事件の武力鎮圧を受けた民衆から「法西斯」(ファシスト)の罵声が上がった。
- 56) 乾酪に対する中国人の敬遠は邱永漢の指摘(『中国人と日本人』, 中央公論社, 1993年, 39頁)の通りだが、醍醐を精髓とする酪酥は中国で、内林政夫『右の文化と左の文化 中国・日本おもしろ考』(紀伊国屋書店, 1998年)にも出た(35頁)様に、「龍肝・鳳髓・兔胎・鯉尾・鸚鵡・狸脣・熊掌」と並ぶ「八珍」(8種の珍味)だ。
- 57) 「折光」(屈折した光)は客観的な写実を否定し、作家の主観の屈折した投影を重ねる流派の名で、王蒙・高行健(2000年ノーベル文学賞受賞者)が中心。「雑色」は王蒙の小説(1981年)の題。

- 58) 2者の訳の違いと中国語訳の妙味に最初に着目した研究者は竹内実か。其の『中国論 之11 老子・荘子・素粒子 中国古典と関西的なもの』（『あうるーら』、21世紀の関西を考える会、1998年夏季号）の中で、日本語訳の「初めに言<sup>ことば</sup>があった。言<sup>ことば</sup>は神と共にあった。言<sup>ことば</sup>は神であった。」と中国語訳の「太初有道，道與上帝同在，道就是上帝。」との比較が有る（166頁）。
- 59) 邱永漢『中国人と日本人』、中央公論社、1993年、64頁。
- 60) 「外儒内道」を擬<sup>もじ</sup>った佐々淳行の見解、出所同註37。
- 61) 1969年、毛沢東の決裁で新しい政治局の候補者名簿が作成され、第9期党中央第1回総会で可決された。同じ活字を用い得票順で並べる通例と違って、原案の格式の儘で新聞に公表されたリストでは、毛沢東・林彪の名前を1号活字で一番上に置き、少し間隔を開く下に周恩来・陳伯達・康生の名前を3号活字で刷り、上記5人の常務委員と区別して平の委員・委員候補は4号活字で姓の画数順で出た。林彪の秘書も含めて当時の人々には異様な印象を与えた（張雲生著・横山義一訳『私は林彪の秘書だった』、徳間書店、1989年〔原典＝『毛家湾紀実 林彪秘書回憶録』、春秋出版社、1988年〕、175頁）が、此の手の均衡が得意芸の周恩来の点検と毛沢東の認可を得ただけに興味深い。林彪夫人・葉群は「葉」の簡略字・「叶」の画数のお陰で第3序列群の筆頭に踊り出て、本人は舞い上がった（同176頁）が、「正・副統帥」の夫人への配慮と勘繰られても、邪推とは言い切れぬ節が有ろう。江青も同じ理由で前の方に出たが、此の様に中国人の「争先」（先を争う）願望は色々な形で現われる。
- 62) 一例を挙げると、毛は1920年に建党や革命運動の資金集めを章士釗に依頼し、章の尽力で各界名流から銀貨2万円が集まったが、63年から自分の原稿料から毎年2千元を章への「債務返済」に当て、決まって「年初2」（旧暦1月2日）に秘書に届けさせた。実質的には生活補助なのだが、明言すれば相手は受け取らぬので「還債」の名義にしたわけだ。累積額が2万円に達した72年から秘書は打ち切ったが、此の金は老先生への手当てだから額面通りに10年完済と言う訳には行かぬとして、毛は今年から利息返済の名目で続けるよう命じた。50年の利息の妥当額は判らぬが、とにかく「行老」（「行」は章の字<sup>あざな</sup>・行箴の略、「老」は尊称）の存命中に返済して行こう、と言った。（章含之『我與父親章士釗』。戴晴・鄭直淑・章含之『梁漱溟、章士釗與毛沢東』〔香港達芸出版社、1988年〕所収、71～73頁）章は北洋軍閥・段祺瑞の内閣で司法総長兼教育総長を務め、毛が好きな魯迅に批判された事があり、魯迅が「民国成立以来最も暗黒な日」とした1926年3月18日の惨事（國務院への侵入をしようとしたデモ隊が政府の武力鎮圧で47人の死者を出した事件）で章が民衆の非難を浴び、共産党の要人・李大釗の逮捕命令を起草した（後に李は避難先のソ連大使館から強行に連行され処刑された）事も有るが、毛は全く意に介しなかった。
- 時間や意識形態<sup>イデオロギー</sup>・利害を超越する中国人の「報恩」（恩返し）観念は、此の逸話に好く現われる。一般的に学者や政治家経験者と認識される章は、『辞海』の項も属性の規定や評価を避けた程の「雑色」人物で、毛沢東時代では忌避すべき「歴史（経歴）複雑」の部類に入るはずだったが、魯迅と心が通じ合うと自称する傍ら魯迅が敵視した章の恩義を忘れずにいたのは、「一日為師、終身為（是）父」（1日でも師を為した人は終身、教え子から父親並みの尊敬を受ける）と言う様に、一旦生じた恩義及び其への返報義務は時効が無い故だ。恩師・徐特立（建国前後の党中央宣伝部次長）を敬う理由に毛が此の成句を挙げた（註43文献、516頁）のは、マルクス・レーニン主義と無関係の中国の常識の拘束力の証だ。毛の内実の多くは儒教を含む中国の古層に帰せると言う指摘は、階級闘争の教義に偏る西欧の共産主義原理に於ける個我の身の処し方の欠落を考えれば仕方が無い。

「仕方」は日本語独特の当て字なのだが、仕途に就く方法も含んだ孔門の教・学内容と妙に符合する。因みに、謝恩の完済を忌み嫌う傾向は日本でも見られる。田中角栄の支持で首相に成った中曽根康宏は然るべき政治的な見返りをし後、此で借りは返せたと漏らした処、帳消しと取った田中角栄に不快を表わされた。20世紀前半の中国では日本人は中性的な異称の「東洋人」とも呼ばれたが、此の例を引き合いに出すまでもなく毛の本質は間違い無く広義の東洋人だ。相手の面子と実利を勘案しつつ以心伝心で寸志を供与したのも、中・日共通の気配りの芸当である。

此の美談を裏読みすれば、毛や中国人社会の色々な機微に気付く。第1、恩返しに関する中国の代表的な格言「滴水之恩，当湧泉相報」(一滴の水の[様な小さい]恩に対して、湧く泉[の様な大きな返し]を以て報いるべし)は、百倍や千倍、万倍の返報を理想とする点で中国的な規模を感じさせるが、上記の謝恩は故郷の山中に建てた毛の別荘の名・「滴水洞」とも通じて、「滴水之恩」に対する「滴水之報」と言うべきか。毛主席の言葉は「1句頂1万句」(1言は万言に値する)と言う林彪の誉め殺しに憤慨して、彼は1言は1万言に成る訳が無いと言った。1は飽くまでも1だと言う等身大の現実主義は、秘書が理解した同額面の返済予定額の根底に有ったろう。何故より早くより多い返済が出来なかったかも、併せて考えて置きたい。

毎年元本額面の1割ずつ返済する方式は一括完済に比べて、儀礼面だけでなく実益の点でも合理性が高い。「細水長流，吃穿不愁(常有)」(細い水が長く流れる風<sup>ふう</sup>に儉約すれば、衣食に愁い無し[常に有る])の法則で量れば、吝嗇の観も有る「涓涓細流」(涓涓たる細流)めく分割払い<sup>ぶんかくばい</sup>は先方にとって有り難いはずだ。同音の「施恵<sup>シーホウエイ</sup>」(恩恵を施す)と「実恵<sup>シーホウエイ</sup>」(経済的)は此処で、奇妙にも意味の連環を見せる。43年も経った後に始めた返済も間が抜けた様だが、此の格言を裏返せば補助の必要の発生と言う契機をより実感できる。寄付は中国流の「義捐」の字面通り、義侠心に基づく喜捨であり本来は返済を期待せぬ物だ。章の暮らしに困難が無ければ抛<sup>ほう</sup>って置いて好く、寧ろ其の方が相手の自尊心や満足感を満たすわけだ。起因は章の家計の個別問題かも知れないが、援助が「3年困難時期」の直後に始まり「文革」後期まで続いた事は、60年代初期の失政や後に林彪一味が秘密政変綱領の中で非難した人民生活水準の実質的な低下と結び付けば象徴的だ。

反面、10年間の均等返済は毛沢東時代の貨幣価値の安定の裏付けとも取れる。更に大きな枠組みの中で振り返れば、高水準の通貨膨脹が儘有った20世紀前半も含めた中国貨幣の意外な一面も目に付く(D・ウィルソンは周恩来伝記[註92文献]の中の「何十年も後に成って首相の座に就いていた周は、かなり厳しい調子で父親を追憶して“月給30元にも満たない官吏”だったと言っている」の件に、「当時の米ドルにして30ドルぐらい。周の生涯を通して大体に於いて中国元と米ドルは同じだった」との脚註を付けた[日本語版、2頁])。とは言い、実質購買力の対比もせず銀貨と人民幣を同値扱いにしたのは、大雑把な「糊塗帳」(并勘定)の印象は免れない。然しながら、利息の観念を持ち出した処には、貨幣に触りながらぬ毛の確りした経済観念が窺える。因みに、章は継続決定の翌年に92歳で逝去したが、老先生の存命中に支払い続けると言う指示には、多寡<sup>たか</sup>が知れているとの計算も或いは有った事か。但し、債務返済も1代限りとは合理的な考えでもある。理・礼・力・利は此の事例に於いても、多様な相関や価値判断の可能性を見せている。

毛は「還債」開始直前の62年末、自分の70歳誕生日の祝宴に4人の湖南同郷と子女各1名を招き、其の中に章士釗や若い頃の自分の学費負担者兼「保護人」(後見人)を買って出た従兄・王季範が居た。其の際に連れられた章の娘・含之と王の孫・海容は、「文革」中に前者が毛の英

語通訳と外務省亜細亜局副局長と成り、「編外家庭成員」（編制外の準家庭構成員）たる後者が副外相まで抜擢された（註43文献，469～471頁）。章士釗への経済的な恩返しの子女まで及ばぬのは理に適うが、其の娘の出世に貸した力は其を上回る恩沢だ。2001年の日本外務省は田中真紀子外相に「伏魔殿」と糾弾されたが、4半世紀前の中国外交部が外相・喬冠華と夫人・章含之、王海容等で固まったのも不正常的の状態と言うべきだ（「4人組」に寄り過ぎた喬夫妻は「文革」直後に失脚）。

毛が最晩年に王海容を自分と中央政治局の間の連絡員にしたのは、周恩来・鄧小平と「4人組」の双方とも信用仕切れぬ故の措置だが、身内に対する重用は党の私物化と批判されても仕方が無い。「文革」開始時の章士釗の職務 中央文史館館長も毛の斡旋かどうかは不明だが、もう1つの公私混同を指摘するなら、其の義拳の財源と成る原稿料の「湧泉」じみた無尽蔵ぶりは、「文革」中の組織動員に依る大量販売の結果であった。

更に陰の部分を書くなら、知人への謝恩や救済には吝かでない反面、戦争中庇護を受けた「革命の揺り籠」・延安には建国後に1回も行かず、周恩来が70年代初めに仏大統領に御供して訪れた際に、涙ながら地元の関係者に反省した程の貧困ぶりを長年放置したのは、不義理としか言い様が無い。「還人一馬」どころか「一毛不拔」の誹りも免れないが、毛は故郷の湖南省に対する国家の財政支援をも控えさせていたと言う。尤も、湖南は元々援助の必要が少なく寧ろ全国に寄与する豊かな地域だし、地元利益誘導型の日本政治家と正反対の毛の姿勢は天下を重んじると言う評判にも繋がる。

63) 註47文献，104頁。

64) 「文革」元年の國慶節祝典の際に、林彪は毛沢東より1分余り遅れて天安門に到着したが、葉群夫人は「政治的事故」と見て随員を叱咤し、首長（林）は主席より半歩でも先に城楼の上ってはいけず、主席より30秒でも遅れては行けず、1～2分早く着きエレベーターの処で主席を待つのだ、という「最大の政治」なる原則を決めた。其の為に随員は警備部門の協力を取り、毛が出発する直前に連絡を得て林を送り出す事にした。（張雲生『私は林彪の秘書だった』[註61文献]，157～158頁）其の苦心の先着の時機も此の逸話のミソであり、徒に早く着くのもNo.2の矜持を損ねると思われた事か。

因みに、東大法学部卒、国立図書館調査立法考査局政治議会課長を経て'93年に細川護国首相の主席秘書官を勤め、2年後に駿河台大学法学部教授（日本政治論・比較政治）に成った成田憲彦の準実録小説・『官邸』（講談社，2002年）の中の、「連立政権の最大の実力者と自他ともに認める」（上，13頁）・財部一郎（田中角栄と思われる角田茂男[「茂男」は田中角栄の筆頭秘書・早坂茂三の名から取った物か]元首相の秘蔵っ子、「民自党幹事長」経験者との設定等から推せば、小沢一郎が原型か）と首相が密会する場面で、先着しホテルの1室に待つ財部は首相首席秘書官・風見（作者の分身なる主人公）に、「総理のお召しだから、張り切って来たよ」と冗談めく言い、後から来て恐縮の意を示した首相の「お待たせしたのではありませんか」に対して、「根がせっかちな者ですから、勝手に早く来ただけです」と応えたが、「秘書が付いて定刻通り姿を現す大物政治家の多い永田町では、財部は確かにせっかちな方だった。個々の政治家が時間に就いてどういう感覚を持っているかは、秘書官にとっては意外に重要な情報だという事を、風見は其の後も学んだ。」（上，87頁）礼を尽くす意思表示をしながら卑屈に成らぬ鷹揚さを保つ財部の振る舞いは、林彪と何処と無く通じ合いより高次の大物の風格が漂う。

竹中昇元首相が総理と密会する場面（上，409頁）でも、「3時きっかりに（ホテルの）喜多課

長の案内で、(略)11階に姿を現した。これだけ時間に正確なのは、やはり大物の証拠である。一般に永田町は時間に正確で、霞ヶ関はルーズである。霞ヶ関の役人たちが時間にルーズなのは、人に待たす事に慣れているからだ、それは本当に権力を持つ者のやり方ではない。」と有る。原型は紛れも無く気配りが永田町随一の竹下登だが、其の礼法の極意 <sup>ま</sup>間の均衡感覚(中国流で言う「分寸感」は、次の件にも示現された。「わざわざご足労いただき、有難うございます。さあどうぞ」/総理は、卑屈には成らず、然し折り目正しく竹中を招き入れた。」

65) 出所は『論語・八佾篇第3』の「子入太廟，每事問。或曰：“孰謂鄴人之子知礼乎？入太廟，每事問。”子聞之，曰：“是礼也。”(太廟[周公の廟]に入った孔子は、作法を一々訊ねた。或る人が「鄴の役人の子供「孔子」は礼を知っていると誰が言ったのだろう。太廟の中で作法を一々訊ねている[のではないか]」と言った。其を聞いて孔子は、「此[慎重な確認]こそ礼なのだ」と言った。)金谷治訳『論語』(岩波文庫，1963年)では、「太廟」ならぬ「太廟」と成る。「始祖の靈廟」の解(46頁)は正しいが、中国の版本で一般的な「太廟」は「太祖」や「太初有道」(註58参照)を連想させる点でも違和感が少ない。

66) 「曾子有疾，召門弟子曰：“啓予足！啓予手！『詩』云：‘戰戰兢兢，如臨深淵，如履薄冰。’而今而後，吾知免夫！小子！”(曾子が病気に罹った時、門人を呼んで言った。「我が足を看よ。我が手を看よ。『詩経』曰く、‘戰戰兢兢にして慎み、深淵に臨むが如く、薄氷を履むが如く。’私は今後もう其の心配は無いね、諸君。)」『論語・泰伯篇第8』のこの1節は、『孝経』の「身体髮膚，受之父母。弗敢毀傷，孝之始也」(身体髮膚，<sup>これ</sup>之を父母に受く。敢えて毀傷せざるは、孝の始めなり)の教義に沿って、小心翼翼に維持した肉体の完全さを門人に示した、と言うのが普通の解である。

李沢厚は『論語今読』(安徽文芸出版社，1998年)の中で、従来の訳に多い「看我的脚，看我的手」を牽強附会・意味不明として退き、「摆正我的脚，摆正我的手」(摆正=正しく置く。きちんと並べる)と訳した(199頁)。金谷治訳『論語』(岩波文庫，1963年)の講釈に、「啓」は布団を開く事とするのが通説であるが、「啓」の意味で解した(107頁)と有るが、中国では「視」と解す向きが多い。楊伯峻『論語訳註』(中華書局，1980年)の講釈は王念孫『廣雅・疏証(積詁)』説を引いて、此の「啓」は『説文解字』の「啓」(=視)だと言う(79頁)。「啓」の「開」の意から忖度したと言う李の論断は表題通り今風の読解だが、俱に漢字の思惟の経路を辿った点で2方とも恣意性は感じられぬ。此处で中国の通説に従った理由の1つは、身体の保全に関わる周恩来の痛切な心情とも絡み合う事だ。

1925年，21歳の鄧穎超が党の仕事の負担を案じた末，遠征中の夫・周恩来に無断で中絶した。滅多に怒らぬ周(註92参照)は白状を聞いて激怒し、「革命第1，事業(仕事)第1」の觀念に囚われぬ其の単純さを激烈に責めた。曰く、「出産と革命を対立させるのは“形而上学”(觀念論)であり，子供は個人の私有財産ではなく国家・社会に属する者だから，其(原文=他[彼])を勝手に抹殺する権利はお前には無い；而も軽率に自分の身体を台無しにする(原文=糟蹋)とは全くの無責任だ。身体は革命の資本であり，お前自身に専属し意の儘で扱える物ではない。必要な時には我々は何時でも革命の為に血を流す用意が有るが，自らの身体を軽々しく傷付ける事は決して許せない。」相談もせず独断した(原文=自作主張)軽率さをも叱られた夫人は，幼稚・軽率を認め寛恕を乞ったが，子供を失った不幸は夫婦に一生補えぬ損失を与えた。(南山・南哲主編『周恩来生平』，吉林人民出版社，1998年，137～139頁)

「形而上学」を「唯物弁証法」の対概念とし觀念的な空論の代名詞に使う中共の用法は，唯物

「儒商・徳治」の道：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化（2）（夏）

主義を哲学・史観の基礎に位置付ける党の理念や、印度哲学を空言の塊と貶した毛沢東の価値判断（註89参照）と一致する。上記の「摆正」は状態を正すか関係を正常化する意も有るから、李沢厚の「啓」の解は哲学者らしい形而上の妙味を持つ。次の段落で臨終の曾子は「君子所貴乎道者三」（君子が尊ぶ心得は3つ有る）、即ち「動容貌」（容貌を厳肅にする）・「正顔色」（表情・態度を端正にする）・「出辞気」（言辞・語気を留意する）と説くので、手足の位置を正す 身を正すと言う「摆正」説は、『論語』の脈絡と主旨に沿ってはいるが、「当代大儒」・周恩来の即物的な側面に照らせば、書齋派の「形而上学」の嫌いも否めない。

身体を革命の資本とした周の命題は「革命」の修飾語が付くが、「資本」（毛が愛用したのは「本銭」「元金」）で唱えた其の主義は資本主義的な損得勘定が根底に有る。勝手・軽率を咎める原文の3カ所の「随随便便」は、中国人の国民性の「馬馬虎虎」（いい加減）の同義語だが、肉体への損傷に対する中国人の敏感は、破壊・毀損を表わし強姦の含みも持つ「糟蹋」（台無しにする）の強烈さに窺える。

性別不詳の胎児を「他」（彼）と記したのは、同音の「她」（彼女）との併記が面倒な故の便法だが、男児を好む潜在意識が執筆者乃至当事者に有ったかも知れぬ。韓素音は周恩来の性格や指導部での位置に因んで、其の伝記に『長男』の題を付けた（ELDEST SON Zhou Enlai and Making of Modern China, 1898-1976. 日本語版題 = 『長兄』、註92参照）が、家系の視座から此の挿話を味わえば、周の異例な激昂は遂に子供が無い儘で終わった夫婦の将来への予知さえ感じ取れる。『孟子・離婁章句上』の「不孝有三、無後為大」（不孝は3つ有り、其の中で後裔が無い〔家が絶える〕のが最大と為る）は、旧い固定観念として其の時代にも引き摺っていたが、周家の子孫繁盛に対する責任感が彼の脳裏を過ったか否かも興味を引く。其の遺恨に於ける言外の含みの有無は窺い知れぬが、身体は個人の私有財産でなく孝行の根本だと言う儒家の理念は、個人主義の隠れ蓑たり得る。

隠れ蓑は「啓」の語訳に出た布団と繋がるが、日本語の「布団・蒲団」と中国語の「棉被・被子」の違いも気掛りだ。「蒲団」は官能小説・『肉蒲団』の題が示す様に昔の中国でも有ったが、今2国の表記は完全に無関係な物だ。「主動」の反対語の「被動」も入れず和製漢語の「受動」を使う処と合わせて、被害等の負の形象が付く所為か「被」を好まぬ日本的な感覚に因る現象だ。「被服」は『広辞苑』で「着物を着ること。又、着物。“ 廠 ” “ 費 ” と解されたが、中国語では動詞の用法は無く布団・衣服を指す。2者の共通する機能の「包身」（身を包む）は、巡り巡って同音の「保身」の文脈に通じる。

更に件の曾子語録と日本語訳の表記のずれを追及するなら、原文の驚嘆符の「！」が「，」「。」と成るのも面白い。形式を内面の発露と見做せば、激情が好く噴出する中国語的な表現と、穏やかな緩衝の間や丸い収まりを好む日本的な情緒との対極が浮上する。引用符の前の「：」は日本では通常の縦書き書式「」と処理せざるを得ぬ程馴染まないが、中国では西洋並みに定着している。「冒号」（号 = 符）の名称の「敢えて。冒す」の含みは、被引用者への忌憚とも解せるが、字面に戦闘的な響きが漂うのも事実だ。

67) 師哲・李海文著、劉俊南・横澤泰夫訳『毛沢東側近回想録』、新潮社、1995年（原典 = 師哲・李海文著『在歴史巨人身边 師哲回憶録』、中央文献出版社、1991年）、269～270頁。

68) 井波律子は『酒池肉林』（講談社現代新書、1993年）の中で、「歴代皇帝の物量主義」（14頁）を考察したが、同氏の「中国の大快楽主義」（論文集〔作品社、1998年〕の題）と共に、示唆に富む命題である。

- 69) 『辞海』の「夏」の語釈に、「中国人自称。『書経・舜典』：“蛮夷猾夏。”孔伝：“夏，華夏。”孔穎達疏：“夏訓大也。中国有文章光華礼義大。”「華彩。『周礼・天官・染人』：“秋染夏。”賈公彦疏：“秋染夏者，夏謂五色，至秋氣涼可染五色也。”と有る。「商」のは「販売貨物。如：經商。也指從事商業的人。如：小商小販。參見“商賈”，は「商量。如：有事面商。『後漢書・宦者伝論』：“成敗之来，先史商之久矣。”李賢注：“商謂商略也。”」其の「五色」は本稿の「五味」「雑色」と結び付けば面白い。
- 70) 日本絡みの例を挙げると、曾て鄧小平は松下幸之助に經濟運営の助言を求め、朱鎔基は逆に儀礼的な性質が多過ぎるとして日本の経財界訪中団との会見を嫌ったと言われる。
- 71) 最も劇的な一幕は1991年8月31日、夜10時に中央テレビで放送された翌日の『人民日報』社説の中の「改革・開放政策の遂行に当り、4つの基本原則を堅持し、姓は“社”か“資”かの区別を忘れては成らぬ」を聞いた鄧が削除を命じ、11時の放送及び翌日の紙面から其の1文が消えた事だ(楊炳章『鄧小平 政治的伝記』[註7参照], 297~298頁。楊の註[349頁]に拠れば、当初の放送と紙面のずれは事実で、鄧の指示は非公式筋の情報)。
- 72) 設計者・曾聯松は意匠の説明文の中で、大きな星は中国共産党、4つの小さい星は労働者・農民・小資産階級・民族資産階級の表徴だと記した。審査委員会では4階級を表わす構想に反対する意見も出たが、毛沢東は此の案に支持し、中国革命の勝利は正に共産党の指導の下で労働者・農民を基礎とし小資産階級・民族資産階級と連合し共に闘争した結果だと述べた。(原非・張慶編著『毛沢東入主中南海前後』, 中国文史出版社, 1996年, 271~272頁)但し、『辞海』の「中華人民共和国国旗」及び「5星紅旗」の解では、「旗上の5顆五角星及其相互關係象徵共産党領導下の革命大團結」(旗上の5つの5星及び其の相互關係は共産党の領導の下での革命的な大團結を象徴する物だ)と言う新華社の趣旨説明(49年11月15日)中の抽象的な件(同274頁)を踏襲した。'50年代の「社会主義改造運動」に因る民族資産階級の消滅も、4階級説の蒸発の1因か。『中国百科大辞典』(註54参照)の中国国旗の説明では、「4顆小星代表着中華人民共和国建国時4個階級 工人階級、農民階級、小資産階級和民族資産階級」(中華人民共和国建国時の4つの階級 労働者階級・農民階級・小資産階級・民族資産階級を代表している)と成る(64頁)が、持続を表わす「~着」は何時まで有効かは曖昧だ。
- 73) 此の成句の出典は不明だが、抗日戦争中に既に「工農兵学商，大家来救亡」(労働者・農民・兵・学・商，皆で滅亡の危機から国を救おう)との合い言葉があった。
- 74) 林克・凌星光訳『毛沢東の人間像 虎気質と猿気質の矛盾』, サイマル出版会, 1994年, 176頁。
- 75) 竹内実『毛沢東』, 中公新書, 1989年, 185頁。
- 77) 毛沢東は1931年の詞・『漁家傲・反第1次大「困剿」』(反第1回大「包圍掃討」)の後に、共工が怒って頭で不周山に触れた神話の『淮南子・天文訓』『国語・周語』『史記』司馬貞補「3皇本紀」の諸説を挙げ、自分は の方を取り共工を勝利の英雄と見做す、と記した(日本語文献として武田泰淳・竹内実『毛沢東 その詩と人生』[文芸春秋新社, 1965年]129~132頁参照)
- 78) 『辞海』の「儒将」の定義は「指有儒者風度或文官出身的將師」。
- 79) 山本七平『參謀学 「孫子」の読み方』, 日本經濟新聞社, 1986年, 1~4頁。
- 80) 註47参照。
- 81) 「在我身上有些虎氣，是為主，也有些猴氣，是為副。」(江青宛ての手紙, 1966年7月8日)
- 82) 内山完造『忘れ物3つ』(初出 = 『中国40年』, 羽田書店, 1946年), 註50文献所収, 52頁。

83) 吳承恩『西遊記』（人民文学出版社，1992年）註，6頁。

84) 『西遊記』第2回『悟徹菩提真妙理 斷魔歸本合元神』（菩提真妙の理を悟徹し 魔を断じ本に歸し元神に合す）の中で、須菩提（釈迦の10大弟子の1人）祖師の門下で数年修行した孫悟空は或る日、皆の前で長生の術の伝授を乞ったが、祖師は其の生意気を叱り彼の頭を3回敲き、2手を後ろに回して奥に入り中門を閉ざした。周りは驚き説法の中断を悔やんだが、彼は3更（真夜中）に裏門から入るよう暗示する仕草と取った。深夜に行ってみると、其の悟性の天資を喜ぶ師祖は望み通り秘訣を教えてくれた。

孫悟空は「打破盤中暗謎」（奥底の謎を解き破る）の際に、「從後門里伝我道理」（裏門の内て私に道理を伝授なさる）と師祖の意図を解した。「文革」後期から社会的な現象と成った「走後門」（裏口經由[入学・入隊・入社]）は、其処に1つの祖型が見られる。特権を利用し子女に便宜を与えたとして極左派が葉劍英元帥等の古参革命家を非難した時に、裏口で行く（入った）人は必ずしも悪い人とは限らず、裏口で行かぬ人は必ずしも好い人とは限らぬと毛は言った。私生活で廉潔な人でも失政しない保証は無く、多少の私欲を働いても貢献の方が大きい事も有るので、尤もな相対評価とも思える。毛は孫悟空的な「猴氣」の持ち主と自己規定した（註81参照）が、「走後門」への弁護も屈折ながら彼の「猴王」と通じ合う。

件の謎の出題は典型的な「啞謎」（無言の謎）だが、其の禅問答と関連して「方便之門」の出典の1つは『景德伝灯録28』だ。因みに、「方便」の「〔仏〕」（梵語 upāya）衆生を教え導く巧みな手段。真実の教法に誘い入れる為に仮に設けた教え。目的の為に利用する便宜の手段（『広辞苑』）も、「導師」・毛沢東の2面に対応できる。猶、単純な2元構図では片付けられぬ中国の言語・思想の多角性を映して、『辞海』の「方便」は次の多義を持つ。「仏教では権宜を表わし、「権」に同じ。水準が違ふ各種の人々に対して違ふ伝道方法を以て信仰させる事に謂う。

方法。遣り方。機会。便利。用便（原文＝解手）」

「権宜」（＝臨機に事を取り計らう事。便宜の措置。機宜。『広辞苑』）は日本では馴染みが薄いが、字面が「力・利」の2極に当て嵌まるのは面白い。仏教色が薄れた現代日本語の「方便」は『辞海』の其の原点と繋がるが、建前を重んじる故「嘘も方便」の諺に違和感を抱く中国人は一方、排泄行為の隠語に用いる処に実用主義を窺わせる。「開後門」ならぬ「開下門」を指す中国独特の尾籠な語義は、天界の柱に放尿する心算で如来の掌の中で孫悟空が遣った悪戯を思い起せば、又『西遊記』や仏教との接点が見える。

85) 「世有伯樂，然後有千里馬」（世の中に伯樂が居て、始めて千里の馬が育つのだ）で始まる韓愈の『雜説』は、「馬之千里者，1食或尽粟1石」（千里を走る馬は，1食に1石の穀物を平らげる事も有る）と言う。

86) 『西遊記』第98回『猿熟馬馴方脱殻 功成行滿見真如』（猿馬が馴れて方めて殻を脱する 功行が満ちたれば真に見ゆる）の話：西方の仏祖の地に到頭辿り着いた唐三蔵一行は如来至尊釈迦牟尼文仏に謁見した後、阿儼・伽葉2尊者に宝閣に案内され一部の經典を授与された。「教他伝流東土，永注洪恩」（彼等に此を東土に流布させ、我が洪恩を永遠に注がせよう）と言う如来の指示とは裏腹に、2尊者は見返りの贈与を要求した。進物の用意が無いと聞いて、「白手伝経継世，後人当餓死矣！」（手ぶらの方にお経を渡し世に伝えて行ったら、我々の後裔は飢え死にしておしまうよ）と笑った。如来に直訴するぞと孫悟空が脅かすと一応渡したが、其は字が書いてない白紙であった。帰路で気付いた一行は戻って如来に抗議したが、仏祖は笑って宥めた。曰く、「2人の要求は知っているが、経は軽々しく伝え、又手ぶらで受ける物ではない。曾て比丘聖僧たちが

舎衛国の趙長者の家に<sup>くだ</sup>下り、生者の安全と死者の解脱を保証すべく此の経を一通り読んでやったが、貰った布施は只3斗3升の米と幾許<sup>いくばく</sup>の黄金だけだった。余りの安売りでは後々子孫は無一文に成ろうと、私は彼等を咎めた(原文=我還說他們<sup>てい</sup>破<sup>は</sup>賣<sup>う</sup>賤<sup>せん</sup>了<sup>了</sup>, 教後代子孫沒錢使用)。そんな訳で、手ぶらの貴方に白紙の経を与えたのだ、云々。

中国茶は一般的に1杯目より2杯目、3杯目が美味しいが、『西遊記』の此の話の面白みも順次増す物だ。如来は釈明の上で有字の経を与えるよう2尊者に命じたが、彼等は珍楼宝閣で又もや進物を無心した。唐三蔵は唐の帝が下賜した紫金の鉢盂を差し出して、「聊表寸心」(寸志に代えさせて頂きます)と口上を述べ、帰国後改めて厚い謝礼を弾むよう約束して、漸く本物の經典を交付された。更に面白い事に、阿儼は下の者たちに「不羞」(恥知らず)と嘲笑われて、一瞬恥じらって顔を皺だらけにしたものの、受けた進物<sup>しんもつ</sup>は確り<sup>しつぷ</sup>抱え込んだ儘だ。羞恥心の呵責を感じつつも既得利益を手放さぬ其の忸怩たる「厚臉皮」(鉄面皮)は、滑稽ながら理・利の葛藤を表出する物だ。賓客に対する如来と現場責任者の態度は、礼・力2極の乖離にも見える。

- 87) 毛の長年の主治医・李志綏に抛れば、彼は建国直前に新中国への夢を膨らませて米国から帰国しようとした際、香港の友人から知識人徵募役の党幹部に対して、好い就職先の斡旋と引き替えに口レックスの腕時計を贈るよう勧められ、共産党の清廉を疑わぬ彼は断ったが、7年後に其の経緯を話すと毛は哄笑して「本当に世間知らずだな」とからかい、「水清ければ魚棲まず」の諺を以て人間関係の情理や贈答の正当性を論じた。(李志綏著、A・サーストン協力、新庄哲夫訳『毛沢東の私生活』、文芸春秋、1994年[原典同]、上61～62頁)如来の笑いと弁護に照らせば、証言の信憑性を益々感じる。

『文選・東方朔・答客難』の「水至清則無魚」(水は至りて清ければ則ち魚無し)や『後漢書・班超伝』の「水清無大魚」が出典<sup>くだり</sup>の格言は、裏門工作を全面的に否定せぬ毛の観方(註84参照)の根底にも有ったろう。やがて贈与を断った事を後悔するに至った李の心境の変化(91頁)は、過度の純粹の負面を突く其の古来の格言を裏付けたが、初心<sup>うぶ</sup>な初心<sup>しよしん</sup>に対する全面否定は墮落や腐敗にも繋がる。南京大学の学生が裏口入学を白状し退学を決意した事から起った「走後門」批判の中で、毛は古参革命家を庇う政治的な意図から無条件の非難を退いた(註84参照)が、結果的には党風刷新を望む大衆に水を差した。「是々非々」とは違う其の灰色の糊塗は特権行使の口実<sup>くわくじ</sup>に援引され、「不正之風」の蔓延の遠因とも成った。『鄧析子・無厚』の「水濁則無掉尾之魚」(水濁れば即ち尾<sup>ふる</sup>を掉<sup>お</sup>ろす魚無し)や『韓詩外伝1』の「水濁則魚喞」(水濁れば即ち魚<sup>あざと</sup>喞<sup>う</sup>)は、政治を正しく行なわねば民衆が窮屈に成る事の比喻だが、「水(至)清～」の逆説に対する反命題とも思える正論の存在は、表と裏、光と影が隣り合う中国思想の特色を窺わせる。

器官の無い顔に7つの穴を開けられた中央の帝・渾沌の即死の寓話(『莊子・内篇・応帝王第7』)は、「水至清則無魚」の後の「人至察則無徒」(人は至りて察すれば則ち徒[仲間]無し)にも通じる逆説だが、曖昧糊塗は無条件で認める訳には行かない。「水・濁・渾」に引っ掛けて言えば、日本語の「お茶を濁す」と誤魔化しの意を共有する「把水攪渾」(水を掻き回して濁す)は、境界線や論理の刷り換え等を表わすが、李を論ず毛の言い回しも無邪気な「攪渾」が有った。彼は抗日戦争勝利後の国・共重慶談判の際に郭沫若から腕時計を贈られた例で贈与を正当化した<sup>が</sup>、高名な文学者からの無償の敬意の表示(因みに、中国語の「表」は「手表」[腕時計]の略)と、返報を期待する求職者の贈与との混同は不条理も甚だしい。尤も、左様な「至察」ならぬ融通無碍も大国の領袖の条件か。

但し、凡そ如来に相應しくない「売賤」（安売り）云々と同じく、金品の供与や無心を肯定する毛の話自体は清濁2面を示す象徴性がある。『西遊記』の原文の中の進物を表わす「人事」も、現代では其の意を失ったものの示唆に富む。返報の義務を伴う義理に言う「人情」と共に、人間関係の基本事項や人情の常と成る贈与の性質を思い知らせる表現だ。

「人事」の通常の語義に絡むが、件の党幹部は実は党中央調査部（情報部）の1員で、後に全国政治協商会議の多くの代議士と同様に某「各民主党派」（諸野党団体）の指導者として再浮上した、と李は言う（62頁）。共産党員の身分を隠して野党の要職を占める絡繰は、人気挽回を狙う中共が影響力や徳望を顯示すべく公表に踏み切る80年代までには、1党独裁の形象を忌避する為に伏せられていたが、関係者の間では公然の秘密でいた其の裏工作と2重の顔の一体は、「公・秘」「表・裏」の虚実皮膜として特筆すべきだ。

88) 孫悟空は師祖が提示した「術」字門の道（吉凶を知る占術等）、「流」字門の道（儒・釈・道・陰陽・墨・医諸家や仏教・道教等）、「静」字門の道（座禅等に由る禁欲等）、「動」字門の道（不老の秘薬の錬製等）の伝授を、其々長生の保障が無い期間の不十分、或いは玄妙過ぎるとして断った。師祖は第2、4の道の特色として、其々「壁里安柱」（壁の中に柱を立てる）、「水中捞月」（水中に月を掬う）の譬えを使った。（『西遊記』第2回）中国人の志には社会の棟梁を成す事が有るが、壁を支える柱も大厦の傾きと共に朽て了うと言う師祖の予告は正直だ。一方、共産主義への憧れが共産党中国でやがて薄れたのも、水中の月めく幻影とを感じる人が多い故だ。

89) 1973年11月12日、毛沢東はキッシンジャーとの会見で、孔子を軽蔑し老子に敬意を表し印度の仏教哲学を最も讃えたヘーゲルの価値判断に言及し、最後の方の非常に受動的な哲学を評価した彼には賛成しかねると言う相手の論評に同調した。続いて米国務長官は「西洋の知識人は印度に恋い焦がれますが、此は印度の人生哲学を完全に読み間違えている事から来ています。印度哲学には、現実に適用しようとの意図は全く有りません」と述べ、毛は「空虚な言葉の塊ですね」と相槌をした。（W・パー編、鈴木主税・浅岡政子訳『キッシンジャー「最高機密」会話録』、毎日新聞社、1999年〔原典同〕、237頁）

90) 呉承恩『西遊記』（人民文学出版社、1992年）「前言」（華東師範大学古典文学教研室 郭豫適・簡茂森）、17頁。

91) 毛は1975年8月14日、北京大学中文系（中国語文学部）講師・盧狄との談話で斯く語った。「『水滸伝』の妙味は“投降”に在り、人民に投降派を知らせる反面教材だ。『水滸伝』は汚職官吏のみに反対し、皇帝には反対しない。晁蓋を108人から除外した。宋江は投降して修正主義を行い、晁蓋の“聚義堂”を“忠義堂”に改名し、人々を（朝廷に）帰順させた。」其を伝聞で知った宣伝部門の責任者・姚文元は毛に上書し、今世紀と来世紀に於いて修正主義に反対しマルクス主義と毛主席の革命路線を堅持して行く為に重要且つ実質的な意義を持つ指示として、公表を要請し了承を得た。

毛の論評は姚が急先鋒とする極左派に周恩来・鄧小平への攻撃に利用されたと言われるが、彼が批准せねば公に成る事も無かったので責任は逃れられぬ。笠井孝之は『毛沢東と林彪 文革の謎 林彪事件に迫る』（日中出版、2002年）の中で、劉少奇の獄死に対する毛の責任に就いて、「文革中のどんな事も、毛沢東の支持、黙認が無ければ絶対不可能だった」という陳伯達の証言を引いた（54頁。原典＝師東兵『政壇秘聞録』、香港・港龍出版社、1998年、295頁）が、其の通りである。

周の絶大な人気と鄧の強烈な「文革」路線是正に対する警戒や反発を秘めていたとすれば、梁山泊の元首領・晁蓋に対する宋江の「架空」(棚上げ。除外)や「修正」云々は、「影射」(甲を借りて乙を暗に指[射]す。当て擦る)や「授意」(意を告げて遣らせる。入れ知恵する)の容疑さえ出て来こう。談話の時期と方式から推測すれば其程の深謀遠慮は考え難いが、政治との不可分は中国文学の宿命であり、1字1句の重みは中国の君主の言説の特徴である。

江沢民・朱鎔基が統治術の参考とした二月河の「清帝系列」小説の中で、軍機大臣・于敏中が宦官を買収し乾隆帝の読書傾向等の情報を掴もうとし、発覚後に不興を買い失脚したとの1齣が有る(『乾隆皇帝』第6巻『秋声紫苑』、河南文芸出版社、1999年、第13回『理宮務皇帝振乾綱清君側敏中遭黜貶』、236～250頁)。毛と国防相・彭德懐が激突した1959年の廬山会議でも、毛の政治秘書・田家英が機密秘書、英文秘書、警備官等の「内線」(内部の情報源)から其の動向を探り、『阿Q正伝』を配布する予定等を聞き出した(李銳『關於毛沢東功過是非的一些看法』、註51文献、163頁)。

小説を利用して反党活動を行うのは一大発明だと言う、62年の小説・『劉志丹』批判の際の康生(理論家・元情報工作責任者)の論断は、中央総会で毛が其のメモを読み上げた事(張涛之著、伏見茂・陳栄芳訳『中華人民共和國演義』第3巻『肅清の始まり』、冒険社、1996年[原典=作家出版社、同年]、290頁)から毛の語録として流布したが、魯迅の小説を以て中央委員会を洗脳するとは、統治・文化一体化の伝統に沿った古典的な行動と言える。「4人組」は毛の『水滸伝』の感想を第1級の情報と武器に利用したが、政治的な利用を承知で毛は彼等の野心を政治的に利用した節も有ろう。「大串聯」に於ける毛と紅衛兵の相互利用を註5の論評で指摘したが、大衆は『水滸伝』論評・「投降派」批判を横目に、古典名作の焚禁の中で「反面教材」として市販した此の作品の70回版や百回版を入手し抜け目無く楽しんだ。

姚文元の「本世紀・下世紀」云々は4半世紀後の世紀の交を睨む氣宇壮大な表現だが、暗に毛の「百年之後」(逝去後)を仄めかして其の心の琴線に触れようとの魂胆も見え隠れする。晁蓋が108人に入らぬのは戦死の為で筋が通るはずだが、歴史の舞台から消えた彼に注目し人為的な排除と邪推した毛の深読みは、没後の自分と中国の運命に対する懸念の強さを姚に再認識させたのか。他界の陰影を手掛りに振り返れば、死去の1年前に「御進講」を受け文学談義に耽る毛が再び少年の時の愛読書に接し、而も武勇譚の裏の権謀に着目したのは、毛の変貌と中国思想の複雑系及び両方の影の部分の物語る事だ。

曾子の「君子所貴乎道者三」(註66参照)は見舞いに来た孟敬子に述べた言葉だが、先立って彼は「鳥之将死、其鳴也哀；人之将死、其言也善」(鳥が死のうとする時は其の鳴き声も哀しく、人が死のうとする時は其の言葉も立派だ)と言い、命の果ての箴言の重みを強調した。其に当る周恩来の真情の吐露は正に『水滸伝』論評・「投降派」批判の開始直後、余命が4ヵ月も無い頃に病院で関係者に発した物だ。「動容貌・正顔色・出辞氣」の模範と言える彼は珍しく忿憑を顕わにし、彼等(極左派)の矛先は明らか(に自分を向ける物)で余りにも酷いと断じた。やがて大手術に臨む彼は、政敵に蒸し返されかねぬ無実の「叛徒」容疑を否定する数年前の自分の談話の録音記録稿を取り寄せ、担架車の上で丁重に「周恩来 於進入手術室(前)」(於・手術室入り[“前”の1字脱落])と記し、「私は党・人民に忠誠を尽くすのです。私は投降派ではありません！」と渾身の力を振り絞って絶叫した。(『周恩来生平』[註66文献]、1579～1580頁)

「戦戦兢兢、如臨深渊、如履薄氷」の警句を引き手足の保全を門人に見せた重病の曾子の姿(註66参照)、次の段落の「人之将死、其言也善」「君子所貴乎道者三」、及び周の件の言行とを相

互に参照すれば、曾子の拳動はやはり孝行たり得る完膚の維持の誇示と解するのが順当で、周の至  
高な保身の対象は高次の身体・髪膚とも言える名声・<sup>イメージ</sup>形象に思える。強姦の含みも有る「糟蹋」  
（註66参照）と関わるが、「保身」の反対語の「失身・破身」は貞操の喪失を意味する。周は革  
命の為なら妾や娼婦に成るのも辞さぬと言った（註92参照）が、其の止むを得ない究極の献身は  
可能な限りの保身の裏返しに他ならぬ。

- 92) 中国で余り知られざる此の台詞は海外で好く引き合いに出されており、本稿の「中国複雑系」の  
論題に即して日本語訳文献を挙げれば、先ず城山三郎の『総理の死』（『サンデー毎日』1978年7  
月16日号）の次の件が思い浮かぶ。「周恩来の魅力は、何処に在ったのか。ノ司馬長風著『周恩  
来評伝』（竹内実訳、太平出版社刊）は、かなり批判的と思われる本だが、其の中から拾い上げ  
ると、先ず第1に、“人の能く忍べぬ事を忍ぶ 近代中国の政治人物の中で忍という点を論じ  
るとすれば、周恩来を先ず第1に数えなければ成らない”とし、周恩来が語ったと言う言葉を伝  
えている。ノ“唯‘忍’の1字有るのみだ。革命の為には、噛み締めた歯が砕けたなら、血と共  
に呑み込まなければ成らない。革命の為なら、我々は妾に成らなくては成らない。必要とあらば、  
娼婦にだって成らなくては成らない”」（『中国 激動の世の生き方』、文春文庫、1984年、20頁）  
<sup>ハン・スーイン</sup>韓素音著、川口洋・美樹子訳『長兄 周恩来の生涯』（新潮社、1996年〔原典=94年〕）に、  
其の経緯は次の様に紹介された。「(1927年)湖南省の長沙で、市を支配していた国民党軍の師団  
長に由って、百人の共産党員が公衆の面前で斬首された。師団の政治委員は仰天して、其の残虐  
行為を糾弾しに武漢の周のもとに急行した。だが、血に飢えた師団長は汪精衛の友人だったし、  
国共合作は有名無実になっていたとは言え、建前としてはまだ支持されなければ成らなかった。  
其がコミンテルンの命令だった。“我々は黙っていなければ成らない。抗議するわけには行かない  
のだ”と周恩来は言った。“何故です？叩かれても殺されても文句が言えないなんて、我々は  
困り者なのですか？娼婦なのですか？”“そうだよ、同志”と周は答えた。“革命の為なら、我々  
は困り者の役も、娼婦の役さえ演じなければ成らないのだ”」（81頁）

<sup>ハン・スーイン</sup>韓素音が参考にしたディック・ウィルソン著『CHOU: The Story of Zhou Enlai 1898-1976』  
(1984年)の記述も、政治委員の実名(柳寧)を出す処、上記の下線の部分が「唾を吐き掛けら  
れ叩かれても」と成る処(田中恭子・立花丈平訳『周恩来 不倒翁波瀾の生涯』、時事通信社、  
1987年、84頁)を除けば大同小異だ。尤も、同書第8章の「妾の娼婦も務めよう、必要なら娼婦  
にも成ろう」(84頁)は、前半は上記の「~の役さえ演じなければ成らない」とは微妙に違い、  
後者は同書「結び」の中の「売春婦の真似をする覚悟も必要だ」(318頁)とは不統一だ。

ウィルソンが註記(350頁)で挙げた此の逸話の出所は、1976年1月23日『朝日新聞』の松  
野谷夫の署名記事；西河毅『周恩来の道』(徳間書店、1976年)；Hsu Kai-yu(許芥昱)  
『Chou En-lai, China's Gray Eminence』(Doubleday New York, 1968。日本語版=高山林太郎訳『周  
周恩来 中国の陰の傑物』、刀江書院、1971年)；Li Tien-ming(李天民)『Chou En-lai』  
(Institute of International Relations, Taipei, 1970。日本語版=桑原寿二訳『周恩来』、実業の世界社、  
1973年)だ。正真正銘の初出に辿り着くのは所詮無理だが、中共以外の経路で発信された事は間  
違い無い。

ウィルソンが参考資料一覧の冒頭で論評した通り、中共の長年の指導者情報非公開の慣習及び  
個人崇拝を恐れる本人の配慮に因り、大陸で周の伝記が無い状態は長らく続き、刊行解禁後も事  
実関係には矛盾点が多い(364頁)。此の逸話は今後も恐らく最後の禁域の内に封印されて行こう  
が、隠匿に因り憶測が却って独り歩きし易いのは皮肉だ。興味深い事に、域外の著者は其の赤

様々な現実主義には余り反感を示していない。ウィルソンは許と李の著書に就いて、2人は共産主義を敵視する反面、中国人として周の長所を誇張する処が多いと述べた(361頁)。本土の中国人の反応も其処から類推し得るが、「婊子(小老婆)養的」(淫売女[妾]の子め)が最大級の侮辱語に入る中国の精神風土への理解が高い程共鳴も強く湧く。「噛み締めた歯が砕けても、血と共に呑み込まねば成らぬ」(咬碎牙往肚里咽)も、中国独特の決意の表わし方だけに中国人の心を震撼し易い。

其々の文献は一長一短が有るが、事実・本質2面の信憑性の高い物として韓の労作を推したい。日本語版の訳者が後書きで言及した通り、1956年以降の約4半世紀の間に約60回も訪中し、周恩来・鄧穎超への長時間取材は其々9回、6回重ね、関係者への聞き取りも綿密に行なったのが何よりの強みだ(401頁)。「周恩来党の1人」と自称した(400頁)一方、本書は周恩来の失敗や短所を探し其等を書き記した物だと自ら語った(著者前書き、1頁)処は、可成り批判的な印象が付き纏いながら韓の同業者(作家)・城山三郎が周の魅力の例証として引いた司馬長風(本名=嚴静文)の上記著書(原典=Biography of Zhou Enlai, 香港・波文書店, 1974。日本語版=翌年)に通じる。周は「評『水滸』, 批(判)投降派」運動(註91参照)で「当代宋江」と擬されたが、負面を持ちつつ人望が集まった宋江や影の部分の添加に由る『水滸伝』の造形法(註94文献参照)と重なって観れば、複雑系の妙味は又滲み出る。

『長兄』は日本語訳者の評の通り、客観的な事実の記述に重点を置いた第3者的な観点からする伝記ではなく、寧ろ周への賛歌や恋文と成っている(400頁)。映画化したメロドラマ(H・キング監督。1955年度アカデミー主題歌賞・衣裳賞)で名高い韓の出世作の自叙伝的な小説(52年)の題(A Many Splendored Thing)の日本語訳『慕情』(中国語訳=『愛情至上』)は此処でも適応できるが、演歌・『雨の慕情』(阿久悠作詞)の「憎い 恋しい/憎い 恋しい/巡り巡って 今は恋しい」を思い浮かべれば、正・負の感情・評価の対立・転化も回転扉に見えて来る。再び本稿の主旨に戻るが、蒋介石と対抗すべく連盟を結んだ汪精衛の武漢政権との関係や、<sup>コミンテルン</sup>共産国際の指導を尊重する立場の制限に因り、不義理・不条理を覚悟した周の非常時の非情な態度にも、理・礼・力・利諸要素の葛藤が見られ、其の割り切り方は原則や利害を配慮した理外の理だ。尤も、其の5月21日の肅清に続いて長沙一帯で1万人強の革命群衆が殺され、其の後7月15日に汪精衛は共産党と決裂したから、周の忍耐は結果的に無為の犠牲に繋がったとの観方も成り立とう。元より一種の板挟み状態と成る回転扉を通る事は、周旋の余地と共に怪我の危険も大きい。

韓は件<sup>ハシ</sup>の場面の後に、「そう言った時、周は、ごろつきの前で這って見せた韓信の故事を思い出していたのだろうか?」と付け加えた。実録の枠組みからはみ出した此の推論は、<sup>さすが</sup>流石に中国人の父とベルギー人の母との間に中国に生まれ、香港を含む華人圏で長い年月を過ごした文学者の踏み込み方だが、自分と姓を共有した彼の淮陰侯の故郷と周の故郷・淮安が隣り合う事(本稿後述)を意識した跡が無い処に、中国に関する土地勘・「歴史勘」(「土地勘」を擬った筆者の造語、歴史に対する熟知度の意)の不足も感じる。「師団長は汪精衛の友人」云々は2人の当事者の地位や関係とは微妙にずれるが、中国から遠ざかった経歴を考えれば無理も無い。「師団長」の用語にも著者か訳者の「言語勘」や「観念勘」の弱さが出た。『周恩来 不倒翁波瀾の生涯』では「国民党左派の指揮官(許克祥)」と成るが、許の当時の職務・「団長」は「聯隊長」が正しい(「師団長」は中国の「師長」相当)。

因みに、『長兄』の訳者後記の中の韓素音の経歴も簡単過ぎて、印度の軍医と結婚し米国で医

「儒商・徳治」の道：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化（2）（夏）

学を修めた後、42年に25歳で娘を連れて渡英した件は、周南京主編『世界華僑人物辞典』（北京大学出版社、1993年）の記述と若干違う。後者に拠ると、祖籍が広東で河南で生まれた韓の本名は周月賓（父親の名は周英東）、幼年から北京で就学し、北京大学医科を経て、35年にベルギーに赴き医学の勉強を続け、37年に中国に戻り抗日救国活動に参加し、42年に「韓素音」の筆名で処女作を発表し、同年に渡米し、44年から4年間医学を修めた後、ロンドンで医者を1年間務め、49年に香港に着き英国籍を取得し、50年代初めに香港・マレーシア・新嘉坡で医者を務めた。（77頁）

さて置き、其の事件が中国で「馬日事変」と呼ばれるのは、当時の電文に於いて21日は略語の「馬」で表わされた事に因るが、今の中国でも事変自体も含めて歴史知識の風化は進んでいる（日付を表わす1字の略語は、『辞海』の『中国歴史紀年表』の「附【録】3 音目日表」で列挙してあるが、其の流儀自体は廃止されて久しい）。「理・礼・力・利」を始めとする本稿の文字遊戯風の連想を飛躍させると、同志を落胆させた周の返答は「韓信」と同音の「寒心」（失望して心を痛める。慄然とする）の2方に関わり、股の下を潜る韓信の「胯下之辱」の「胯」の「肉・夸」の字形は、巡り巡って曾子の肉体保全の誇示の話と繋がる（「夸」は中国語で「誇」の簡略字）。

93) 日本で一般的に流布される「豚の様に生き抜け」は、怠惰・不潔の形象の強い動物を前面に出す点で迫力の有る名訳と言えるが、原文の「牲口」も捨て難い滋味を持つ。「牲」は祭祀の備え物の羊が原義で犠牲や「沈黙の羊たち」を連想させ（「綿羊」は中国で柔弱・従順の性格の代名詞）、「牛・生」の字形は動物的な生存本能の表徴に映る。卑俗な「牲口」の標準的な言い方は「家畜」だが、「畜」は鬼畜・人非人を言う中国の侮辱語の「畜生」と重なる。漢の都・長安に近い台地に建設された隋の新都・大興城の碁盤状の街路で区切られた百8の区画・「坊」の「家畜の檻の発想」の所産とし、統一国家・隋の統治思想の原点を遊牧民族の家畜の統率に求める千葉大学教授・大室幹雄の直観的な仮説（陳舜臣・鎌田茂雄・NHK取材班『NHKスペシャル 故宮 至宝が語る中華5千年』第2巻、日本放送出版協会、1996年、200～201頁）と結び付ければ、更に象徴的な余韻が漂う。因みに、隋が江南の漢民族の国・陳を制圧し中国を統一したのは、天安門事件の武力平定の恰度千4百年前の589年の事だ。

94) 文献34、9～19頁。

95) 我こそ玉皇の嫡君で、舅殿から10万の天兵を授かり、貴様等江洲の奴等を遣っ付けに来た；閻魔大王が先駆け、5道將軍が後詰め；授かった金印は重さ百余斤、云々。（『水滸伝』第39回『潯陽樓宋江題反詩 梁山泊戴宗伝假信』[潯陽樓に宋江は反詩を題じ 梁山泊に戴宗は假信を伝う]）。玉皇の嫡と自称した処は、宋江の権力志向と「只反貪官，不反皇帝」（註91参照）の傾向の反映か。

96) アジア政経学会西日本部会2001年度大会第5分科会（歴史関係部会）で、水谷尚子（日本女子大学院生）が『建設期の中国人民解放軍空軍 東北航空学校（東北老航校）と日本人教官』の題で発表した研究報告は、中国の公刊・内部資料を駆使して、林彪の意志に由り関東軍「林飛行隊」が敗戦の翌年から中共空軍の創設に尽力した経緯を回顧・分析した。中で特に注目を引く事実は、「開国大典」（建国式典）で天安門広場の30万人の観衆が見上げる空に華麗な編成飛行を披露した17機の操縦士に、林弥一郎隊長等が直接指導した者が含まれた事だ。留用日本兵の関与の事実公開の解禁は'84～'85年頃の事と報告されたが、思うに、此の年の建国35周年記念日に林彪事件後に13年ぶりに祝賀行事が再開され、編成飛行を含む盛大な閱兵式が行われたのは、彼等の教

え子・王海（'49年東北航空学校卒）が'85年に空軍司令官に成った事と共に、歴史の年輪を感じさせる暗合だ。其の関東軍飛行隊と東北解放軍の総司令の姓は同じ漢字の「林」だったが、朝鮮戦争で発揮した王海等の挑戦精神と日本人教官の特攻隊精神の類通と合わせて、曾ての敵同士の同根性を窺わせる。

97) 前出の囲碁観戦の話に繋がるが、精々「棋逢對手」(将棋・囲碁で好敵手に巡り逢う)と言う。此の4字熟語の後に好く続く「将遇良才(材)」(対戦で俊才の将軍に巡り会う)も、評価の意があるので敵側を形容する場合には馴染まない。

98) 魯迅『拿来主義』(1934年、『且介亭雜文』[同年]所収)。

99) 1950年、中国人民解放軍軍事学院の創設に当って、院長予定者・劉伯承は軍内の教官適格者の不足を鑑みて、中共に鞍替えしたか俘虜と成った一部の旧国民党軍将校の起用を提案した。国民党陸軍大学の教官も含む彼等の文化水準と軍事知識を買う劉の考えに、周恩来は即座に賛成した。(南山・南哲主編『周恩来生平』[註66文献], 670頁)後に元帥と成った劉伯承は鄧小平の長年の相棒で、黒い猫でも白い猫でも鼠が獲れる猫は好い猫だと言う鄧の「黒猫・白猫(当初は「黃猫」=茶色の猫)」論は、他ならぬ彼が戦争中好く使った言葉だから、興味深い事実である。

100) 『辞海』の「岡村寧次」(1884~1966)の経歴には、陸軍大学卒 1925年に直(河北)系軍閥・孫伝芳の軍事顧問 28年に日本軍歩兵聯隊長、済南惨事の元凶(略)中国派遣軍総司令(最終軍歴)、「三光」政策を実施 日本投降後に蒋介石の秘密軍事顧問 49年1月に国民党政府に由る「無罪」判決 50年に台湾「革命実践研究院」高級教官に招聘 日本に死去、と有る。最後の勤務先の名称は、周恩来の「革命の為なら」論(註92参照)を思い起せば興味深い。朝日新聞社編『現代日本朝日人物事典』(朝日新聞社、1990年)では、孫伝芳の軍事顧問の件も出ず、陸軍大将・支那派遣軍総司令として降伏を迎えた後の記述も、「戦後、中国の戦犯裁判で無罪と成り、以後、蒋介石政権の支援運動に努めた」に止まった(373頁。執筆者=林博史)が、判決時期の国民党大陸敗退直前に当る'49年1月と漠然とした「戦後」とでは意味が大きく異なる。

一方、'49年10月下旬、解放軍華東野戦軍第10兵团(司令=葉飛)の3個団(聯隊)9千人余が福建近海の金門島を猛攻したが、上陸作戦の不慣れと敵の頑強な抵抗で全滅した。万人単位の部隊全滅は中共軍史上滅多に無かったので衝撃的な出来事だが、国民党軍は精鋭の胡璉兵团を投入し、蒋介石の寵愛を受けた湯恩伯上将と顧問の「日本侵華重要戦犯、原華北方面軍司令官」・根本博が指揮に当たった(原非・張慶編著『毛沢東入主中南海前後』[註72文献], 338~346頁)。

根本博(1891~1966)は『辞海』では取り上げてないが、『朝日人物事典』の項(1236頁。執筆者=小林元裕)には次の記述が有る。「44年駐蒙軍司令官。45年終戦直後に北支那方面軍司令官を兼任して敗戦処理に当る。46年に復員するが49年から台湾に密航し、国民政府軍の対中国共産党軍作戦を支援した。52年帰国。」49年の密航は国民党側の要請に由ったと思われるが、鄧小平の名言と日本の諺に引っ掛けて言えば、黒い猫の手も借りて了うほど蒋介石は窮鼠の境地に陥った事か。金門の安泰を確保した後の帰国は言わば臨時雇用の性質を裏付けるが、岡村寧次の帰国時期の明記は上記の日・中の辞(事)典とも欠落している。

猶、『朝日新聞』は好く親共産党中国として国内で敲かれるが、同社編の此の事典の記述の中の「国民政府軍」対「中国共産党軍」は、共産党中国建国後の事にも関わらず国民党政権の権威を認めた物だ。因みに、1文の中の「終戦・敗戦」の併用も奇妙に思う。

101) 『毛沢東入主中南海前後』(註72文献), 297~301頁。筆者は『失われた祖型を求めて 日中礼法の研究: 序説(中)』の中で此の象徴的な事実を取り上げた事が有る(『立命館言語文化研究』

「儒商・徳治」の道：理・礼・力・利を軸とする中国政治の統治文化（2）（夏）

10巻4号，1999年，126頁）が，註96の水谷報告の冒頭でも「林飛行隊」と共に建国式典を彩った2組の日本人の1組として言及された。其の2組の帰心や貢献の経緯及び其の後の中国側の謝恩の濃淡は，本稿の論旨と関わり裏付けにも成る興味深い事象だ。当初は此の註に入れる形で詳細な論考を試みたが，多面に渉る内容につき遂に2万字近くの物と成ってしま<sup>しま</sup>った。掲載誌の総量規制と共に本文との<sup>バランス</sup>均衡関係も有るので，此处では割愛し後日1篇の小論として改めて出したい。

102) 原文は「徳行：顔淵、閔子騫、冉伯牛、仲弓；言語：宰我、子貢；政事：冉有、季路；文学：子遊、子夏。」（『論語・先進篇第11』）

103) 「賦」は金谷治訳では「軍用の収入」と成るが，楊伯峻訳でも李沢厚訳でも「兵役，軍政」と成る（俱に註66文献，其々65，44，127頁）。筆者が中国の通説を取った理由の1つは，兵隊の徴収・統治こそ至難の業である故だ。

## “ 儒商・徳治 ” 之道：以理、礼、力、利為軸心的 中国政治之統治文化（2）

本論文以反映中国近10多年来時代精神的“ 儒商 ”，及指明新世紀方向的“ 徳治 ” 為關鍵語彙，探索以理、礼、力、利為軸心的中国政治之統治文化原理。

本部分首先着重揭示中国人価値觀の基軸 理、礼、力、利的具体内涵及相互關係，併用図式加以体系的、直觀的説明。將4者分為陰、陽2極，指出其弁証的对立統一、相剋相生，以及迴旋門式的互聯可变的轉換機制与作用，是本論文的核心命題和精髓。

由此出發，注目於中国的“ 礼義之邦 ” 伝統和中国人的“ 經濟動物 ” 根性的併存，在將“ 儒將 ” 到“ 儒商 ”，由“ 王霸 ” 到“ 徳治 ” 的演变中發現功利主義的貫穿，透過“ 黒猫、白猫 ” 論等形似超脱仁義的实用主義的一面，看到其反面的重視仁義的理想志向及2者の表裏一体。

（XIA, Gang 本学部教授）

